

## パールダイヤル報告要旨

全国女性シェルターネット 近藤 恵子

### ① 相談内容の特徴

《10代から80代まで幅広い年齢層にわたる当事者からの相談》

- ・半世紀もの間、誰にもいえず苦しんできた。被害の事実は、片時も忘れたことがない。忘れられない。80代女性

《デートDVの深刻な実態》

- ・中・高校生など若年層の相談（本人からの相談、親・友人などからの相談）も多く、デートDV付添支援緊急事例も発生した。

《繰り返しかけてこられるリピーターの存在》

- ・相談を重ねるごとに、少しずつ問題が片付いてきた。自分が何をしたいか、どうすればいいかがみえてきた。30代女性

《最も多かった過去の性被害についての訴え》

- ・相談できなかった、訴えられなかった、信じてもらえるのか、被害の記憶を語るのはここが初めて。
- ・過去の性暴力被害については、有効なリファーマがない。

《相談者が抱える重篤なPTSDと深刻な被害影響》

- ・統合失調症、うつ、依存症、リストカット、自殺未遂、失業、不登校、ひきこもり、家族崩壊 他

《多様な二次被害の訴え》

- ・情報提供するリファーマにはほとんどアクセスしているが、力にならないどころか、二次被害を受けているケースが多数存在している。警察が被害届を受け付けない、医師が診断書を書いてくれない、DVセンターが受け入れない、など。

《24時間365日無料ホットラインの強い継続要望》

- ・夫や家族が寝静まった深夜でもかけられる、無料だからかけられる、必ず話をきいてもらえる、この電話がなくなったらどうすればいいのか、という要望が後半に集中した。27日以降も、一日350件程度のアクセスが続いた。

## ② 相談から支援へ

### 《急性期対応の意義》

- ・直接相談者をつなぐことのできる、医療機関の受け皿があったことの意味は大きかった。被害直後の相談者を、警察対応のあとすぐに病院へつないだケースがある。

### 《付添支援の成果》

- ・被害のダメージや後遺症によって自力で行動できない当事者のために、緊急支援ケースのみならず、関係諸機関へのつきそい支援が可能になったことで、窮地を脱した事例がある。また、付添支援によって、本来の支援システムが利用できたケースも多かった。

### 《官民の連携と地域間格差》

- ・官民の連携協力関係がしっかりとつくられているところと、十分に育ちあがっていない地域との間で、支援格差が生じている。
- ・民間支援団体付添支援空白地域については、リファラーの困難がめだった。

### 《回復支援継続相談へ》

- ・緊急対応ケースについては、付添支援拠点の支援対応を経て、自立支援が継続している事例が多数存在する。

## ③ 必要な取り組み

### 《ホットラインの継続》

### 《医療機関をベースとする子どもと女性のための回復支援センターの設置》

### 《性暴力被害支援員の養成と配置》

### 《関係専門職員に対する研修の徹底》

### 《ワンストップサービスによる行政手続きの制度化》

### 《政令市・中核市を中心とする市区町村DV相談支援センターの設置》

### 《措置による緊急一時保護制度の見直し》

- ・相談から自立支援まで当事者が主体的に権利行使できる回復支援システムを
- ・保護救済施策から人権確立施策への転換を